



## 自己肯定感がよりよい学校生活をつくる

国分北小学校 川野 浩明

朝、国分北小前交差点の横断歩道のところで、立哨をしているとひときわ元気な声で「おはようございます！」とあいさつをしてくれる子供がいます。「元気がいいね。」と言うと、「あいさつが得意なんです。」と教えてくれました。きっと、あいさつをしているときに、いろいろな人に褒められているんだろうなと感じました。

自分の長所や短所を受け入れ、自分に自信をもてることは、自己肯定感という言葉でもよく表現されます。今年県下一斉に行われた鹿児島学力・学習状況調査のアンケート項目には、この自己肯定感に関する「自分には、よいところがあると思いますか。」という項目があります。「当てはまる」と答えた本校の子供は、42.4%でした。別の調査での同じアンケートでは、全国平均は、43.4%なので、ほぼ全国並ではありますが、国分北小では、この「当てはまる」と答えられる自己肯定感の高い子供を増やしていきたいと考えています。



自己肯定感が高まると、まず、学習意欲の向上が期待できます。自分に自信をもてる子供は、新しいことに挑戦する意欲が高く、失敗を恐れずに学ぶ姿勢があるからです。また、人間関係の形成がスムーズになります。自己肯定感が高いと、他者と良好な関係を築きやすくなります。自分を大切にできる子は、他人のことも尊重し、協調性をもって行動できるようになるからです。他にも、精神的な安定につながります。自分を肯定できると、ストレスや不安に対する耐性が高まり、困難に直面しても前向きに対処できるようになります。

このように、小学生のうちから自己肯定感を育むことは、長い人生を豊かにするためにとても大切です。本校でも、子供のいいところを見つけて褒めたり、がんばっていることを認めたりすることを大事にして、学校全体や学級で友達のいいところを発表したり、今日がんばっていた人を発表したりして、自己肯定感や信頼関係を高めています。



褒めたり、叱ったりするときのポイントは次のとおりです。「褒めるときは、性格も含めてよいが、叱るときは行為のみを叱る。」「褒めるときは、過去にさかのぼってよいが、叱るときはさかのぼらない。」「褒めるときは、結果だけでなく、過程も認め、励ます。叱るときは、人と比べない。自分の責任で叱る。」です。学校、家庭で同じように取り組んで自己肯定感を高めていけたらと思います。